

現代の ◆ことば

藤原 辰史



いま、学生時代にお世話になつたらさんから立命館大学のぞき預っている。総務部の大所帯である。学生指導は3年ぶりだ。アイアムがで元気な学生たちと話すのを毎週ひそかな楽しみにしている。友人や私とありのままに議論するのが楽しい。と学生の一人が言ってくれた。最近、第1回目の懇親会をして、酒を飲みながら夜更けまでとことん語り合ったばかりだ。

4回生は、4年間の総括である卒業論文に取り組み。無人島で暮らして社会の成り立ちを観察しようとするツワモノ、独力での広告制作を試みる広告代理店志望者、馬への愛を向き合う熱狂的な競馬ファン、居酒屋研究を志す立ち飲み居酒屋の通など、趣味と美意識、そしてなにより自己表現を兼ねた驚異的な学問を目撃する学生たちの話は、何度

就職活動廃止論

聞いても飽きない。私の知識がほとんど役に立たない、という緊張状態も妙に心地よい。突然だが、経済界のリーダ1、企業の人事担当者に申し上げたい。前職のときもそうだったが、やはり学生たちは就職活動と学業のあいだで悲鳴を上げている。今年から就職戦線解禁は後倒しされたが、現場の感覚ではほとんど効果はない。貴重な半年を就

活で費やしてしまつのは、学生、いや、社会にとつても大きな時間の損失である。せめて、学生の卒業論文が完成するまで待つてほしい。学生の人生を振り絞つたような論文を人事担当者に見せられないのは、私も学生も無念極まりない。最後の1年間、学生たちは仲間とともに卒業論文に打ち込む中で驚異的な伸びをなせる。しかし、この時期、就活のため1週間に1回のゼミを休むことが重なり、指導が難しくなる。友人の発表に行けず、聴く、話す、という基本を養う機会も逸する。調査と読書の時間も少ない。多くの学生たちが学問の面白さに気づくのは4回生であ

る。せめてこの期間に学問の苦しみと悔みを存分に味わつてほしい、と願う。大学は英会話学校でも職業訓練校でもない。無人島で生活する自分を客観的に観察し記述する困難に気づいた学生にどんな哲学が芽生えるのか、自分で広告制作に行き詰まつた学生がどんな文・社会学の理論と邂逅するのか、こんな緊張感ある営みは、大学で時間をかけてしか味わえない。黒と白の「喪服」に身を包む学生を何度もいじつて選ぶ日本式就活に、外国の友人はしばしば驚く。人事担当者も、就活に忙しくて卒業論を手をつけていない学生に何を研究しているかと尋ねるが、そんな

就活は中途半端である。卒業論を企業に見せたいのを見せられない、と意欲的な学生は私によく痛手。たとえば、これはどうだろう。学生は、意中の会社に卒業論を郵送する。気になった学生にはコンタクトをとる。卒業論の公聴会に訪れ、学生たちの話に耳を傾ける。卒業論を読んで面会し、交渉を始める。時間が窮屈なら、入社を半年遅らせてもいいではないか。採算と効率性を度外視して論文執筆に打ち込む。だからこそ、学生たちの生きざまが卒業論には直截的に現れ出るのである。(京都大学科学研究所准教授・農業史)